

江南の故人に寄す

家

鉉

翁

曾て錢塘に向つて住す

鴈を聞いて故郷を憶う

知らず今夕の夢

蜀に到るか錢塘に到るか

【作者】家鉉翁(一二二三～一二九五年)、号は則堂。眉州(四川省眉山)の人。宋末の愛国詩人。官は端明殿学士、簽書樞密院事に至つた。元軍が

都の近郊に駐軍し、丞相の呉堅らが降伏勧告の文書に署名した時、彼は拒絶して署名しなかつた。命を奉じて元に使いして北上し、燕京(北京)に拘留された。宋が滅んでから、元朝で役人になることを拒絶し、河中府に安置されること十九年、学問で生計を立てた。成宗が即位すると、彼はようやく解放されて南方に帰ることができ、ほどなくして故郷で没した。『則堂集』がある

【語釈】\*江南…ここでは、広く長江以南をさす。 \*故人…旧友。 \*向…で。「於」に同じ。 \*錢塘…ここでは南宋の都の臨安(浙江省杭州)をさす。作者はかつて南宋の朝廷で役人となり、臨安の知府・浙江安撫使を兼任した。 \*鴈…ホトトギス。杜鵑。

\*蜀郷…詩人の家郷は眉山であり、蜀中にある。

【通釈】《江南の旧友たちに寄せて》かつては錢塘江のほとりに住み、ホトトギスの鳴き声を聞いては、故郷の蜀をなつかしんだものでした。

でも、私にはわかりません。今夜見る夢の中で、故郷の蜀に帰るのか、それとも古都の錢塘江のほとりに帰るのか。

【鑑賞】この詩は、詩人が燕京に拘留されていた時の作である。宋の遺臣の故国に対する愛着の深さは、わずか二十字の中に余す所なく表現されている。